

『酒さけ、
一いっ杯ぱい。』

作者 浅羽一

いよいよ三月も終わりに近付いていたその日、雪が降った。この冬は暖冬だ、異常気象だと騒いでいたら、今度はいきなり春の雪だ。積もるほどではなかったけれど、それでも気の早い桜の花と、季節外れの雪が同時に見られる光景は、なるほど確かに奇妙で、また美しかった。

当たり前の話だが、寒かった。数日前まで初夏を思わせる陽気だったのに、目覚めてみれば急に氷点下。そろそろタンスの奥にしまおうとしていた冬服を慌てて掘り出して、久しぶりに背中を丸めて家を出た。

仕事を終えて、雪はとっくに止んでいたものややはり気温は低いままで、こんな日とはかくさつさと部屋に帰って風呂に入ろうと、足早に家路に就いていた。時刻はもうじき午前0時、他に人影は見当たらない。

ふと立ち止まり、頭上を仰いだのは、足下から伸びる影に気付いたからだだった。

街灯もまばらな田舎道で、しかも真夜中に、影。何とも不自然な感じがして、しかし直後、思わず感嘆の声を漏らしていた。口から白い息がふわりと広がった。

満月だった、それも縁にそっと触れただけで指を切りそう。冷え切っているせい、か、大気は果てしなく澄んでいて、夜空の色は黒でなくいっそ紺だった。日本画のような雲の欠片がたまに流れていくたびに、凜とした光は優しくほどけて淡い虹を生んでいた。

我に返ると、爪先は勝手に向きを変えていた。

あれほど帰りたいかつたはずなのに、逆らう気はまるで湧いてこず、左右の肩の距離を縮めたまま、足の動きに身を任せた。

歩きながら、昔を思い出していた。そして同時に、今との違いを思い知っていた。

いつしか趣味と呼べるものは失われ、カレンダーに視線を向ける理由はすべからく出勤日の確認で、眠っている間に見ていた夢を起きてからも忘れないでいようなんて、試すどころか考えることさえすでに億劫で。でも、だからといって特別な不幸に苛まれることも無く。

ただただ平坦な一日を、昨日も、今日も、明日も繰り返していく。そうして出来上がる、やはり果てしなく平坦な日常。前を向いても何が見えるわけもなく、だとすればせめて転ばないように足下を確かめながら歩こうと、慎重な振りで諦観を誤魔化し続ける内に、気付けばそれが自然になっていく。

だけど、それなのに、今だけはずっと上を眺めながら。小さな石一つ落ちていない場所ですら、気を抜けば足がもつれそうになる、そんな不安はあつさり流れて消えていた。

街灯と街灯の隙間を埋めるような、ぽつんと明るいコンビニを見つけ、中に入る。ポケットを探るとちやらちやらと小銭が鳴って、一番安いカップ酒を一つだけ買った。

小さなビニール袋をぶら下げて、川沿いの自転車道をしばらく。やがて遂に、足が止まる。

頼りない街灯の他には錆びたブランコが一つあるだけの、公園とは名ばかりの狭い場所。しかしその周りでは、満開の桜が並んでいる。

指先で軽く触れてから、「キィ…」と鳴る木の板にゆっくりと腰を下ろした。両脇の鎖は氷みたいだったものの、ズボン越しに尻へと伝わる感触は、決して辛いものでなかった。

空へ届けとばかりに茂っている枝の先端が、丁度、見上げた視線の延長にあった。月はそのすぐ横にあった。神々しいほどに輝く月は、単に夜空に浮かんでいると言うよりも、

実は純白の光に満ちた世界で暗幕を広げ、そのたった一箇所に丸い穴を開けて作り出されているようだった。

どうしてか、泣きそうになった。だけど、涙で視界をぼやけさせることはあまりにも勿体なくて、だからカップ酒を手を取った。アルミの蓋に指をかけて引くと、静かな世界で小気味よい音が鳴った。

まず、舐めるように一口。舌に載せた瞬間の冷たさは、喉へ流した途端に熱さへ変わり、それも消えると最後に香りの余韻が白い息となつて鼻の穴から抜けていった。

悪くない気分だった。いや、むしろ満たされていた。我知らず両膝をこすり合わせてしまふほどの気温なのに、立ち上がるという気は微塵も起きなかった。

雪洞代わりの街灯が仄かに青白く桜を照らし、そこへ月の光が陰影を重ねる。懸命に伸ばされた枝は先に行くほど細くなっているけれど、咲き誇る花卉はあたかも綿菓子のように、時折、強く風が吹こうとも、不安なんて少しも湧いてこない。風が止んだら、自らブランコを揺らして、見上げる角度を変えてみた。桜に寄り添う光景を眺めるだけでなく、花と花の隙間から月の鏡を覗くこともまた、さながら宝探しめいて楽しかった。

満開の桜と満月の下で酒を飲む。言葉にすればたったそれだけのことなのに、実際は紛れもなく特別で、何よりとてもとても幸運なことだった。例え、どれほどの権力者で、或いはどれほどの金持ちでも、今日という日に空を見上げていなければ決して味わえないだろう感動だった。

「……………」

何と言えばいいのだろうか、こんな時はどんな表現こそ相応しいのだろうか、そして賢くもない頭を回らせた。心の中から今にも溢れそうな感情を、どうすればきちんと形に出来るのか、どうしても自らの力で見つけ出さなければならぬと思った。そうでなければ、もしも今までみたいに適当な言い訳だけで終わらせてしまえば、せつかくの幸福もたちまち単なる偶然の産物に成り果て、そしてもう二度と出会えなくなる予感がしていた。だからこそ、考えた。ろくに手入れのされていない脳みそを必死に使い、些細な手掛かりを求めて記憶を漁った。そもそも、自分の中にある本当の想いがどんなものであるのかを感じようとした。

答は、あまりと言えば唐突に浮かんできた。同時に、自身でも思いがけない可笑しさに、笑みも浮かんでいた。まさか、ずっと昔、ほとんど悩みもなかった学生の頃に、それもほんの一時だけ気の置けない友人達と盛り上がった遊びが出てくるなんて、予想外にも程があった。

でも、それは確かに、いつそ呆れてしまうくらいびったりとはまっています。

「こいこい、か」

この手にあるものなんて、二百円にも満たないガラス製の盃が一つ。だけど、たったそれだけで、こんなにも見事な花見酒、月見酒。

だとすれば、何だ十分じゃないかと、盃の酒をぐいと飲んだ。

止まない風は寒いながらも、火照った肌心地よく。

明日の寝不足を覚悟の上で、もう少しだけ続けてみよう、そう決めた。